

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2000-44724

(P2000-44724A)

(43)公開日 平成12年2月15日 (2000.2.15)

(51)Int.Cl.

C 08 J 11/08

識別記号

Z A B

F I

C 08 J 11/08

テマコト(参考)

Z A B

審査請求 未請求 請求項の数 8 O.L (全 7 頁)

(21)出願番号 特願平11-105722

(22)出願日 平成11年4月13日(1999.4.13)

(31)優先権主張番号 特願平10-161481

(32)優先日 平成10年5月27日(1998.5.27)

(33)優先権主張国 日本 (JP)

(71)出願人 397016909

株式会社スタイルジャパン

鹿児島県鹿児島市祇園之洲町34番地

(72)発明者 真邊 久始

鹿児島県鹿児島市祇園之洲町34番地 株式

会社スタイルジャパン内

(74)代理人 100083024

弁理士 高橋 昌久 (外1名)

(54)【発明の名称】 プラスチックの溶剤、及びプラスチックの回収方法

(57)【要約】

【課題】 各種プラスチックに適用可能な安全衛生的な溶剤系及び同溶剤系を用いた各種プラスチックの回収方法を提供する。

【解決手段】 グルタル酸ジメチル、アジピン酸ジメチル及びコハク酸ジメチルから選ばれる二塩基酸エステルの少なくとも1種を主成分とするプラスチックの溶剤。この溶剤にプラスチックを溶解し、プラスチックが熱分解しない温度及びプラスチックの流动可能な温度の両者を満足する温度範囲で蒸留分離する工程を含むプラスチックの回収方法。好ましくは、蒸留工程に排出機を備えた薄膜蒸発器を用い、減圧度などの条件をプラスチックの分解温度と流动温度との関係において選定することを含む。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 グルタル酸ジメチル、アジピン酸ジメチル及びコハク酸ジメチルから選ばれる二塩基酸エステルの少なくとも1種を主成分とする、ポリエチレン、ポリプロピレン、ポリメチルペンテン-1、ポリスチレン、ポリ塩化ビニル、ポリ塩化ビニリデン、ポリ酢酸ビニル、ポリビニルアルコール、ポリビニルアセタール、ポリメチルビニルエーテル、ポリメタクリル酸エステル、ポリアクリル酸エステル、ポリアクリル酸、ポリアクリロニトリル、ポリブタジエン、ポリイソブレン、ポリクロロブレン、ポリオルガノシロキサン、ポリアミド、ポリカーボネート、ポリエステル、ポリイミド、ポリスルホン、ポリフェニレンスルフィド、ポリエーテルスルホン、ポリエチレンオキシド、ポリプロピレンオキシド及びポリアセタールから選ばれる少なくとも1つを成分とするプラスチックの溶剤。

【請求項2】 請求項1記載のプラスチック溶剤の主成分に、溶解性及び沸点を調節する機能を備えた1又は複数の成分を添加してなることを特徴とするプラスチックの溶剤。

【請求項3】 グルタル酸ジメチル、アジピン酸ジメチル及びコハク酸ジメチルから選ばれる二塩基酸エステルの少なくとも1種を主成分とする溶剤にポリエチレン、ポリプロピレン、ポリメチルペンテン-1、リスチレン、ポリ塩化ビニル、ポリ塩化ビニリデン、ポリ酢酸ビニル、ポリビニルアルコール、ポリビニルアセタール、ポリメチルビニルエーテル、ポリメタクリル酸エステル、ポリアクリル酸エステル、ポリアクリル酸、ポリアクリロニトリル、ポリブタジエン、ポリイソブレン、ポリクロロブレン、ポリオルガノシロキサン、ポリアミド、ポリカーボネート、ポリエステル、ポリイミド、ポリスルホン、ポリフェニレンスルフィド、ポリエーテルスルホン、ポリエチレンオキシド、ポリプロピレンオキシド及びポリアセタールから選ばれる少なくとも1つを成分とするプラスチックを溶解させる溶解工程、及び該溶解工程で得られた溶液を該プラスチックが熱分解しない温度、及び溶液の溶剤が実質的にすべて蒸発した状態で該プラスチックが流動可能な温度の両者を満足する温度範囲で蒸留して、該溶剤とプラスチックを分離する工程とを含むことを特徴とするプラスチックの回収方法。

【請求項4】 前記分離する工程で分離した溶剤をそのままもしくは成分調整後再度溶解工程又は回収プラスチック収集時の溶剤として用いる請求項3記載のプラスチックの回収方法。

【請求項5】 当該二塩基酸エステル以外の他の溶剤成分を選択して、溶解性及び沸点を調節した溶剤にすることを特徴とする請求項3又は4記載のプラスチックの回収方法。

【請求項6】 該溶剤とプラスチックを分離する工程が薄膜蒸発器による蒸留工程である請求項3、4若しくは

5記載のプラスチックの回収方法。

【請求項7】 薄膜蒸発器が、実質的にすべての溶剤が蒸発した状態のプラスチック溶融体を外部へ強制的に排出させるための排出機を備えたことを特徴とする請求項6記載のプラスチックの回収方法。

【請求項8】 薄膜蒸発器における減圧度を選ぶことにより、該プラスチックが熱分解しない温度で且つ溶液の溶剤が実質的にすべて蒸発した状態で流動可能な温度で処理することを特徴とする請求項6又は7記載のプラスチックの回収方法

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、プラスチックを減容若しくは溶解し、分離回収することを可能にする溶剤及び回収方法に関する。

【0002】

【従来の技術】 近年に至り、高分子化学及びその工業技術の発達により、プラスチック類の機能と価格が使用者のニーズに益々適合するようになり、その生産量は頗る増大してきている。それに伴い、使用済みのプラスチック類の処分量も比例して増加している。使用済みのプラスチック類の処分は、最も素朴な方法として、焼却若しくは埋立てが行なわれるが、環境汚染問題に繋がり且つ資源エネルギーの浪費にもなるので、対策が望まれている。そこで、使用済みプラスチックの回収再利用が試みられ、プラスチックの物理特性及び使用形態に応じ、回収・破碎・ペレット化、回収・溶融・ペレット化、回収・熱分解・液化成分の取得、などのプロセスを実用化せんとしている。しかし、これらの方法では場合によって、プラスチックが熱劣化等により再利用するにあたって品質上の問題が発生したり、回収処理取得物の利用方法に問題があったり、そのプラスチックが発泡体など見かけ比重が著しく小のため、運搬にそのままでは費用がかかるなど、必ずしも最善の方法ではない。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】 本発明は回収後のプラスチックの劣化が少ない回収方法を提供しようとするものであって、更に詳しくは、広範なプラスチックが溶解可能で、工程及び取り扱い上の安全性を備え、人体に対する毒性の少なく且つコストあるいは適正コストのプラスチックの溶剤を提供し、それを用いてプラスチックを減容もしくは溶解し蒸留によって分離する回収方法を提供する。これにより、回収運搬コストの低減、回収プラスチックの高品質維持を図ろうとするものである。

【0004】

【課題を解決するための手段】 本発明は対象とするプラスチックの溶剤をその溶解性、沸点範囲、毒性及び引火爆発危険性を考慮して選択することにある。即ち、グルタル酸ジメチル、アジピン酸ジメチル及びコハク酸ジメチルから選ばれる二塩基酸エステルの少なくとも1種を

主成分とする溶剤はポリエチレン、ポリプロピレン、ポリメチルベンゼン-1、ポリスチレン、ポリ塩化ビニル、ポリ塩化ビニリデン、ポリ酢酸ビニル、ポリビニルアルコール、ポリビニルアセタール、ポリメチルビニルエーテル、ポリメタクリル酸エステル、ポリアクリル酸エステル、ポリアクリル酸、ポリアクリロニトリル、ポリブタジエン、ポリイソブレン、ポリクロロブレン、ポリオルガノシロキサン、ポリアミド、ポリカーボネート、ポリエステル、ポリイミド、ポリスルホン、ポリフェニレンスルフィド、ポリエーテルスルホンポリエチレンオキシド、ポリプロピレンオキシド、ポリアセタールから選ばれる少なくとも一つを成分とするプラスチックに対して溶解性にとみ、当該三種の二塩基酸エステルの単独又は適当な組み合わせ及び必要ならば適当な他の溶剤成分の追加により必要な特性を調節することが出来ることを見出したことによる。溶解性についての特定なプラスチックに対する三種の二塩基酸エステルの単独又は適当な組み合わせ及び必要ならば適当な他の溶剤成分の追加による溶剤組成の決定は、Charles M. Hansenの提唱する溶解性パラメータシステムを使って行うこともできる。

【0005】すなわちX軸を極性結合パラメーター、Y軸を水素結合パラメーターとする平面上に、特定プラスチックの溶解範囲を円弧として描き、混合溶剤（溶剤組成）のパラメーターを現す点がその円弧内に收まるよう混合溶剤の組成を求める。一方、本発明におけるグルタル酸ジメチル、アジピン酸ジメチル及びコハク酸ジメチルの引火点から予測される爆発危険性及び人体に対する毒性は著しく低いこと、グルタル酸ジメチル、アジピン酸ジメチル及びコハク酸ジメチルは常温乃至加温時においてその揮発性が小さく取り扱い中の作業環境中への散逸が少ないので経済性及び作業環境上にも好ましいことも特徴である。

【0006】更に本発明の特徴とところは、かくして得られたプラスチックの溶液から回収すべきプラスチックを蒸留によって分離する手段として、薄膜蒸発器を使用するところにある。これにより、プラスチックが曝される熱履歴を最小限におさえることができるとともに連続して工程を進めることができる。また、減圧下に蒸留すれば、溶剤の沸点が降下し、プラスチックが高温に曝されがなく熱劣化が防止されるが、一方、蒸留で溶液の溶剤が実質的にすべて蒸発した状態でもプラスチックが流動可能な温度を保つ必要があるので、処理しているプラスチックの軟化点と使用している溶剤組成に応じて適正な減圧度を選ぶことも本発明の特徴である。

【0007】前記したように、処理の温度は出来る限り低いことが好ましいが、処理温度が低いほど当該プラスチックの溶解粘度は高くなる。そこで、溶剤が実質的にすべて蒸発した状態の高粘度のプラスチックが排出可能なように、蒸発器の底部、即ちプラスチック排出部に高

粘度の溶融体でも排出可能にした排出機を備えたことも本発明の特徴である。

#### 【0008】

【発明の実施の形態】以下、本発明を図に示した実施例を用いて詳細に説明する。但し、この実施例に記載される構成部品の寸法、材質、形状、その相対配置などは特に特定的な記載が無い限り、この発明の範囲をそれのみに限定する趣旨ではなく単なる説明例に過ぎない。グルタル酸ジメチル、アジピン酸ジメチル及びコハク酸ジメチルの引火点はそれぞれ94℃、107℃及び113℃と高く常温での取り扱いは勿論、溶解を促進するため回収工程中加温するようなことがあっても、爆発火災の面から充分安全である。ただし、より揮発性の溶剤を混合使用する必要がある場合は引火点を考慮してその割合を調節する工夫や引火点を下げる物質を混合するのが好ましい。また、グルタル酸ジメチル、アジピン酸ジメチル及びコハク酸ジメチルの毒性については各種毒性試験即ち、急性毒性試験、変異原性試験、亜急性毒性試験、生殖試験、発育試験などにおいて低い値を示す。溶解性を調節するなどのため他の溶剤と混合する場合、グルタル酸ジメチル、アジピン酸ジメチル及び/又はコハク酸ジメチルの低毒性成分に希釈されるが、毒性の限界を考慮してその混合割合を調製することが好ましい。

【0009】回収を目的とするプラスチックの溶剤組成を決定するにあたって、Charles M. Hansenの溶解性パラメーターシステムによる方法を以下に説明する。当該プラスチックを溶解性パラメーター既知の各種溶剤に10%濃度で室温にて溶解し溶解性をテストする。このデータを用い縦軸に水素結合パラメーター、横軸に極性結合パラメーターをとった平面上に当該プラスチックの溶解性範囲（solubility envelope）を描く。同時にグルタル酸ジメチル、アジピン酸ジメチル及びコハク酸ジメチルのパラメーター並びにパラメーター既知の他の溶剤をプロットする。溶解性範囲（solubility envelope）の内側のパラメーター範囲が当該プラスチックの溶解可能領域である。多くの場合グルタル酸ジメチル、アジピン酸ジメチル及びコハク酸ジメチルは本発明における回収を目的とするプラスチックの良溶剤であるため、当該プラスチックの溶解性範囲（solubility envelope）内に存在する。

【0010】しかし、前記した理由により他の溶剤との混合溶剤とする場合、混合溶剤のパラメーターはそれぞれの溶剤のパラメーターに混合の容積分率を乗じて加えた値となる。従って、任意の混合溶剤はこの原理によって求めた溶解性パラメーターが当該プラスチックの溶解性範囲（solubility envelope）の中にあるようにその種類及び混合割合を選べばよい。本発明の上記方法によって回収されるプラスチックはポリエチレン、ポリプロピレン、ポリメチルベンゼン-1、ポリスチレン、ポリ塩化ビニル、ポリ塩化ビニリデン、ポリ酢酸ビニル、ポ

リビニルアルコール、ポリビニルアセタール、ポリメチルビニルエーテル、ポリメタクリル酸エステル、ポリアクリル酸エステル、ポリアクリル酸、ポリアクリロニトリル、ポリブタジエン、ポリイソブレン、ポリクロロブレン、ポリオルガノシロキサン、ポリアミド、ポリカーボネート、ポリエステル、ポリイミド、ポリスルホン、ポリフェニレンスルフィド、ポリエーテルスルホン、ポリエレンオキシド、ポリプロピレンオキシド、及びポリアセタールから選ばれる少なくとも一つを成分とするプラスチックを例としてあげることができ、成分の構成様は共重合であっても、ブレンドであってもよい。

【0011】ここに言うポリビニルアセタールはポリビニルアルコールとアルデヒドの反応化合物であって、ポリビニールブチラールを含む。ポリメタクリル酸エステル及びポリアクリル酸エステルはそれぞれポリメタクリル酸及びポリアクリル酸のアルコールエステルの構造を持つ化合物であってポリメタクリル酸メチル及びポリアクリル酸メチルを含む。ポリオルガノシロキサンはシロキサン鎖の珪素に直接アルキル基、ビニル基若しくはアリール基が結合した化合物であって、ポリジメチルシロキサン、ポリメチルビニルシロキサン、ポリメチルフェニルシロキサン及びポリジフェニルシロキサンを含む。ポリアミドはアミド結合によって高分子化した化合物であって、ナイロン6、ナイロン11、ナイロン12、ナイロン66、ナイロン46、ナイロン610、ナイロン612及びナイロン112の如き脂肪族ポリアミド、ナイロンMXD6の如き脂肪族・芳香族ポリアミド、及びp-若しくはm-キシリレンジアミンと塩化テレフタル酸若しくは塩化イソフタロイルとの重縮合物の如き芳香族ポリアミドを含む。

【0012】ポリカーボネートは主鎖中にカーボネート結合を持つ重合体であって、ビスフェノールAとホスゲンの重縮合物を含む。ポリエステルはエステル結合を持つ重合体であって、ポリテレフタル酸エチレン、ポリテレフタル酸ブチレン及びポリナフタレン酸エチレンを含む。ポリイミドは主鎖中にイミド結合を持つ重合体であって、4,4-ジアミノジフェニルエーテルと無水ビロメリット酸の環化重縮合物を含む。ポリアセタールは主鎖中にアセタール結合を持つ重合体であって、ポリオキシメチレンを含む。当該プラスチックの形体は如何なる形でもよく、発泡体、フィルム状、シート状、板状若しくは柱状の成形物等並びにその破碎物等でありうる。

【0013】本発明に用いるグルタル酸ジメチル、アジピン酸ジメチル及びコハク酸ジメチルから選ばれる二塩基酸エステルの少なくとも1種を主成分とする溶剤に本発明の目的のために加える他の溶剤はヘプタン、ブチルカルピトール、アセトン、プロピレンカルボネート、アニリン、二硫化炭素、デカリル、メチルイソブチルカルビノール、メタノール、エチレングリコール、ジエチレングリコールジメチルエーテル、ジプロピレングリコ-

ルジメチルエーテル、クロロベンゼン、プロモベンゼン、フフラーアルデヒド、メチレンジクロライド、n-メチルピロリドン、ホルムアルデヒド、蟻酸、ジプロピレングリコール、メチルイソブチルケトン、ジメチルスルホオキシド、ホルムアミド、ジメチルホルムアミド、ジメチルスルホン、テトラメチレンスルホン、テトラメチレンスルホオキシド、ニトロベンゼン、ジイソブチルケトン、アセトニトリル、エタノールアミン、イソフォロン、シクロヘキサンオール、トルエン、プロピオニトリル、ジアセトンアルコール、イソプロパノール、n-オクタノール、エチレンジアミン、ジエチレントリアミン、s-テトラプロモエタン、エタノール、キシレン、n-プロパノール、n-ブタノール、フェノール、m-クレゾール、2-エチルヘキサンオール、エチルアセテート、メチルエチルケトン、シクロヘキサン、ブチロールアセトン、111-トリクロロエタン及びミネラルスピリット等を例に挙げることができ、その混合溶剤の性質が本発明の目的に適うかぎり、如何なる制限もない。

【0014】かくして本発明による回収を目的とするプラスチックは必要に応じ夾雑物の除去及び破碎をした後に、上記により決められた組成の溶剤を接触させ、減容若しくは溶解する。減容もしくは溶解は当該プラスチックを回収プラントまで運搬し、そこで行うこともできるし、適当な可動溶解槽に廃棄プラスチック発生地にて行い、容積を縮小してプラントまで運搬することもできる。廃棄プラスチック発生地にて行う場合、収集・破碎・溶解・溶液貯蔵など一切の関係設備を車載した専用の収集・溶解・運搬車を使うと便利である。減容もしくは溶解したプラスチックはさらに溶剤を加えて必要な調節をし、適当粘度の溶液とし、それをろ過して固体物を除去する。ろ液は多くの場合水分を多分に含有しているので、この段階であらかじめ脱水しておくのが望ましい。

【0015】次いで、薄膜蒸発器に溶液を供給するに先立ち余熱して流動性と熱量を加え薄膜蒸発器中の蒸発プロセスをスムーズに進めるのが好ましい。薄膜蒸発器での蒸発は、溶液の粘度が低いほど降下する膜圧は薄く、温度が高く、圧力が低いほど蒸発の速度は速いが、蒸発器中の最高到達温度は上限をそのプラスチックの分解温度を、下限をそのプラスチックの流動性の温度依存性を考慮して限定する必要がある。更には、使用した溶剤によって沸点が決っているので、限定された最高到達温度で蒸発が完全に完了するように使用した溶剤の沸点に応じて圧力を決める必要がある。蒸発器の出口付近では実質的にすべての溶液中の溶剤が蒸発しきってプラスチックの溶融体となっているが、分解を押さえるために、流動性を維持するのに必要最低限の温度における溶融体となっている。

【0016】従って、粘度が高く、プラスチックの重力による自然流下では排出困難であるため本発明の方法では、蒸発器の出口付近に排出機を付帯させ、強制的に当

該高粘度のプラスチックを排出させることを特徴とする。排出機は縦型スクリュータイプのものを例としてあげることができるが、これに限定したものではない。排出したプラスチック流体は一定温度に保温をして流動性を保ちつつ、適当な移送手段により押し出し機などの連続成形機に送り、リボン状、棒状に成形し、カッターによって切断、ペレット状の回収プラスチックを得る。このようにして回収したプラスチックは熱分解を徹底して押さえているので、プラスチックの品質は新品プラスチックに比較しほとんど遜色はない。一方、薄膜蒸発器より留出した溶剤は必要ならば成分調整後、ほとんどの場

合そのまま再び本発明の方法を行うための溶剤として使用可能である。

【0017】

【実施例】次に本発明の実施例として、スチレン発泡体の回収の溶剤及び回収の方法を説明する。スチレン発泡体10重量部を各種の溶解性パラメーター既知の溶剤100容量部に室温で溶解するテストを行い、表1の結果を得る。

【0018】

【表1】

#	溶 剂	溶解性	#	溶 剂	溶解性
1	ヘプタン	0	18	クロロベンゼン	1
2	ブチルカルビトール	1	19	プロモベンゼン	1
3	アセトン	1	20	フルフラールアルデヒド	1
4	プロピレンカーボネート	0	21	メチレンジクロライド	1
5	アニリン	1	22	n-メチルビロリドン	1
6	二硫化炭素	1	23	ホルムアルデヒド	0
7	デカリン	1	24	亜酸	0
8	メチルイソブチルカルビノール	0	25	ジプロピレングリコール	0
9	メタノール	0	26	メチルイソブチルケトン	1
10	エチレングリコール	0	27	ジメチルスルホオキシド	0
11	ニトロベンゼン	1	28	プロピオンニトリル	1
12	ジイソブチルケトン	1	29	ジアセトンアルコール	0
13	アセトニトリル	1	30	イソプロパノール	0
14	エタノールアミン	0	31	n-オクタノール	0
15	イソフォロン	1	32	エチレンジアミン	0
16	シクロヘキサノール	0	33	ジエチレントリアミン	0
17	トルエン	1	34	α-テトラプロモエタン	1

溶解性：1.溶解、0.不溶

【0019】この結果をもって、X軸に水素結合パラメーターを、Y軸に極性結合パラメーターを目盛ったXY表面に、スチレンの溶解性範囲を上記溶剤のパラメーターとともに図1のように描く。本発明の溶剤であるアジピン酸ジメチル、琥珀酸ジメチル、グルタール酸メチルおよびそれらの混合物の一例の物性は表2の如くであ

り、これらの溶解性パラメーターを図1に顯すといずれのこれら二塩基酸エスチルおよびそれらの混合物もスチレンの溶解性パラメーター内に入り、よい溶剤であることを示す。

【0020】

【表2】

	アジピン酸ジメチル	グルタル酸ジメチル	コハク酸ジメチル	D B E <sup>(1)</sup>
蒸留範囲、℃	227-230	210-215	196	196-225
比重、20℃	1.064	1.091	1.121	1.092
引火点、℃	113	107	94	100
溶解性パラメーター				
極性	2.1	2.3	2.5	2.3
水素結合	4.5	4.8	5.0	4.8

(1) アジピン酸ジメチル 10-15%、グルタル酸ジメチル 55-65%、コハク酸ジメ

【0021】スチル<sup>15</sup>の場合はこれらの2塩基酸の単独もしくは混合の溶剤で本発明の目的効果は最もよく達成されるが、場合によって、例えば溶解性の調節、沸点の調節、引火点の調節、もしくは毒性の調節のために、他の溶剤と混合する必要のあるときは、次のようにして算出できる混合溶剤の溶解性パラメーターの前記図中におけるプロットがスチレンの溶解範囲内にくるようにその混合割合を選べばよい。すなわち、本発明の2塩基酸溶剤の溶解性パラメーターを  $d_0$ 、容積分率を  $x_0$ 、他の溶剤  $i$  の溶解性パラメーターを  $d_i$ 、容積分率を  $x_i$  としたとき、混合溶剤の溶解性パラメーター  $d$  は、

$$d = x_0 d_0 + x_i d_i$$

で求められる。この混合溶剤の溶解性パラメーターのプロットがスチレンの前記図中におけるスチレンの溶解範囲内にくる限り、当該他の溶剤の溶解性パラメーターはスチレンの溶解範囲外であってもさしつかえない。

【0022】ついで本発明の溶剤の内、表2中のD B Eを用い、実際に回収プラントにおいて本発明の方法を実施するときの説明を図2を参照しながら行う。回収されたスチレンの発泡体は本発明の溶剤のひとつであるD B Eと接触して減容もしくは溶解された状態で回収容器1中に収納されて、プラントサイトまで運搬される。本実施例ではプラスチック濃度として50%で行った。回収容器中の内容物は濃度調整槽2に投入し、さらにD B Eを追加、加熱攪拌し次工程の薄膜蒸発器における最適な膜厚を形成するのに適当な粘度の溶液に調製される。かくて調製された溶液は目の細かなろ過材をも容易に通過可能な状態であって、ろ過機3によって首尾よくろ過され、再生プラスチックに混入すると品質に直接影響する細かな夾雑物が除かれる。廃スチレンを回収溶解する段階などで混入してくる、水分は次の段階で除去しておくのが好ましい。使用している本発明の溶剤はリサイクル再利用するが、リサイクル溶剤中の水分は本脱水工程が欠如していると累積して高まり、ひいては溶解性に影響を及ぼすようになるからである。

【0023】また、次の薄膜蒸留の工程では、本発明の溶剤の沸点及びプラスチックの溶融粘度との兼ね合いが

ら選んだ減圧度を条件として、プラスチックとの分離を主眼として行うので、水と本発明の溶剤との分離が困難だからである。而して、脱水器4中に導入された当該溶液は適宜な減圧下に脱水される。脱水後の溶液は本発明の方法である薄膜蒸発機5に導入されるが、本実施例では入り口の温度80℃、溶液中のプラスチック濃度38.5%、粘度23000ボイズ@85℃であった。前記薄膜蒸発器はジャケット温度を230℃~240℃に保ち圧力を40KPaの減圧下に溶剤を蒸留する。プラスチック溶液はフィルム状になって蒸発器内部を流下し所定滞留時間を経て蒸発器下部に至った時点で実質にすべての溶剤は蒸発し高粘度のプラスチック溶融物となっている。もはや自重では流下困難な状態の溶融プラスチックは本発明の方法による排出機6によって強制的に排出され、ポンプの助けを借りて押し出しノズル7へ圧送される。棒状に押し出されたプラスチックは直ちに水冷され固化する。連続した棒状のプラスチックはカッタ-8で切断、ペレットとなる。得られたポリスチレンの品質は、熱劣化がほとんどなく、したがって着色も少なく、物理的特性も新品と比較して遜色ない。

【0024】

【発明の効果】以上実施の形態及び一実施例とともに説明したように、本発明の溶剤は合成プラスチックを溶解し溶液として回収、その後蒸留によってプラスチックを分離するのに、最も適したものであり、溶解性、揮発性、毒性、引火危険性についてバランスのとれた良好な特性を示すものであることが理解される。さらに本回収の方法と組み合わせ本発明の溶剤を用いるとき、プラスチックの熱劣化を防ぎ、同時に効率の高い生産性をもたらし、また、使用した溶剤もリサイクル使用が可能など経済性においても優れた方法であることが分かった。

【図面の簡単な説明】

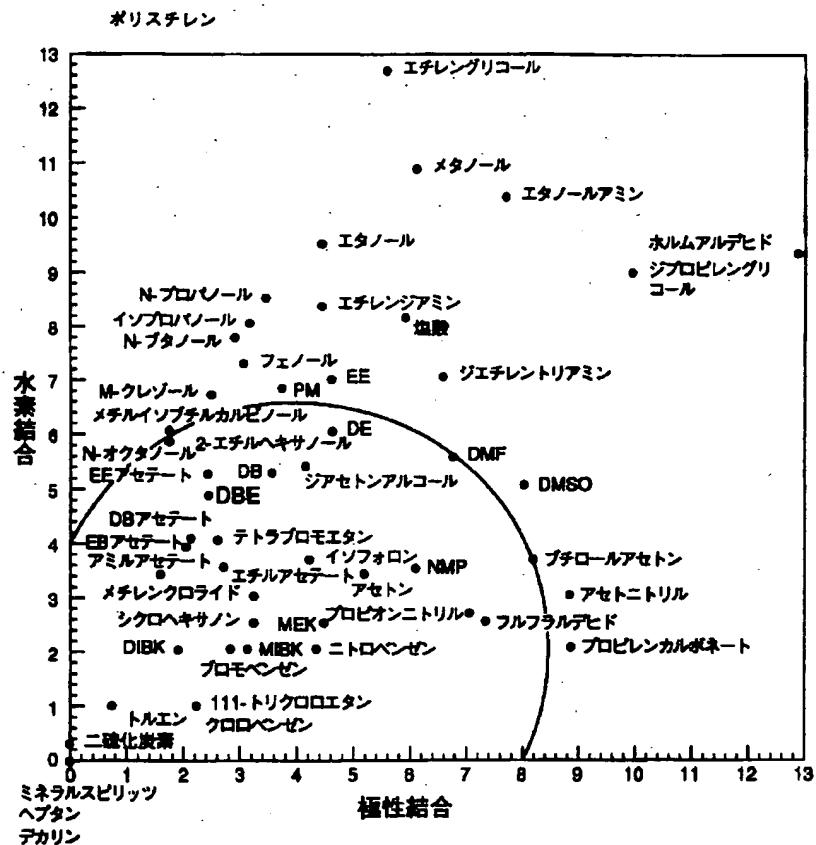
【図1】本発明の溶剤を含む各種溶剤とスチレンの溶解範囲を示すグラフである。

【図2】本発明の溶剤を用いてスチレンを回収するプラントのプロセスフロー図である。

**BEST AVAILABLE COPY**

【四】

### 溶解範圍



【図2】

